キャラクター名: 藤宮秀次(ふじみやしゅうじ)

プレイヤー名:

シンドローム	モルフェウス オルクス	ワークス	UGNエージェントB	カヴァー	手品師
オプショナル		年齢	28	性別	♂
覚醒	感染	衝動	嫌悪	初期侵食率	29 %
出自	有名人	経験	平凡への憧れ	邂逅	主人

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	1	0	1			2
感覚	3	1	0			4
精神	1	0	0			1
社会	3	0	2			5

HP	25
行動値	9
(非装備時)	9
戦闘移動	14
全力移動	28

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃	1		ＲＣ	1		交渉		
回避			知覚	1		意志			調達	2	
運転：			芸術：			知識：			情報：UGN	2	
運転：			芸術：			知識：			情報：裏社会	3	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
拳銃	射撃	4r	0	3		

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ
レザージャケット	4	2			

合計装甲：	2	合計回避：	0

所持品	
コネ:UGN幹部	
コネ:情報屋	
コネ:要人への貸し	

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P:	14	残り財産P：	1

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：	コスト分のHPで復活							
砂の結界	1	2	オート	至近	自身	自動	-	
効果：	行動消費なしでカバーリングを行う。行動済みでも可							
シールドクリエイト	3	3	マイナー	至近	自身	自動	-	
効果：	盾を作成・装備。ガード値［SL×2］+4							
砂の加護	3	3	オート	視界	単体	自動	-	
効果：	対象の判定ダイス+SL個。1ラウンド1回							
妖精の手	3	4	オート	視界	単体	自動	-	
効果：	対象の判定ダイス目を1つ10にする。1回の判定に1回。シナリオ中SL回							
テクスチャーチェンジ	★	-	メジャー	至近	自身	自動	-	
効果：	物品を外見だけ思いのままに変化させる							
テレキネシス	★	-	メジャー	視界	シーン内	自動	-	
効果：	シーン内の物品をシーン内の任意の場所に移動させる。所持品は不可							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

「…おや、どうされました？アナタは確か…最近配属された《吸血者》の方でしたかねェ。……不本意？これは失敬、何か事情があるご様子。では何とお呼びいたしましょう。……かしこまりました。それではアナと。つきましてはワタクシも名乗りを…ああ、もちろんコードネームはご存知でしょうから、本名の方で。ワタクシ、藤宮秀次と申します。以後お見知り置きを」
「それで一体、ワタクシにどういったご用件でございましょう。……挨拶？おやおや、こんな愛らしい方に挨拶をいただけるなんて。ここは真にいい職場ですねェ。お時間はおありで？……結構。では少し語らいませんか？長い付き合いになるでしょうし、相互理解というものですよ。……ありがとうございます。紅茶をご用意いたしますので、少々お待ちを…」
「…お待たせいたしました。……喋り方？ンッフ、お気に障られたのなら申し訳ない。職業柄、自然とこのような口調になってしまうのです。……そうでございますか。実は、そう言っていただけたのはアナタで3人目にございます。嬉しいかぎりですねェ」
「…では、始めましょうか。そうですねェ、まずはワタクシの昔話でも□□」

藤宮。奇術師の家系であり、有名な奇術師を何人も輩出してきた名門家。そんな家に生まれた秀次は、藤宮の教えどおりに奇術の道を歩み進める。しかし、どこかで遺伝子がひっくり返ったのか彼はひどく指先が不器用であり、それは簡単なマジックですら2回に1回は失敗してしまうほどの極みぶりであった。兄弟姉妹には蔑まれ、親戚には陰口を叩かれ、ついには父母からも見放されてしまった秀次は、それでも身につけた話術や失敗そのものを駆使することで客の心を掴むようになる。家族から外道だと罵られようが、お構いなく自分だけの「奇術」を演じ続けた彼にとって、目の前にある観客の笑顔だけが救いだった。
18歳のある日。今日の演目は手のひらの花を瞬時に砂へと変えたように見せる「すりかわり」の手品。どうせ失敗するだろうと決め込んでいた秀次は、しかし儚くもこう願っていた。
(1度くらい、ステージで成功してみたい)
その時、その願いが聞き届けられる。彼の手のひらにあった花が、瞬時に「砂」に置き換わったのだ。思いもよらぬ成功。だが、この結果は明らかに異質なモノだった。何故なら、すりかえる筈の砂は未だ手元にあったのだから。□□つまりは、レネゲイドの発症だった。
彼の初めての大成功に、観客がどっと湧く。…後からわかったことだが、この現象□□いつもとは異なる結果に対する観客の好印象それ自体も、シンドローム:オルクスによる変質だった。あまりにも異質な力を得たことを確信してしまった秀次は、しかし持ち前の話術で冷静を保つ。